

## 第28回庭野平和賞受賞記念講演

木は倒れるとき、轟音を立てて倒れます。しかし木が成長するとき、その音に耳を傾ける人はいるでしょうか。

同じように、戦争、環境破壊、市場経済の悪用、収入格差に関するニュースをはじめ、なかでも深刻な、最近の地震と津波による日本の被災や、いまだ収まらぬ原子力災害を伝えるニュースに、私たちは日々曝されて続けています。それにもかかわらず、なぜか平和や自由や正義に向けた活動を伝えるニュースを耳にすると、私たちは不安を覚え、今の世の中が最善であるかのように考えます。

しかし変革への不安が私たちの心にあったとしても、平和運動は、ガンジーのサティヤグラハ（真理の力）とアヒンサ（非暴力）の遺産を引き継ぎながら、静かに成長を続けています。日本の市民団体であるナマケモノ俱楽部もその一例です。彼らは、ドイツ生まれのイギリスの経済学者 E. F. シューマッハー（1911—1977）の『スマール・イズ・ビューティフル（小さいことはすばらしい）』、すなわち、人間中心の仏教経済学の精神の下、「スローはすばらしい」を実践しています。シューマッハーがその自著を出版したのは40年前ですが、主流の経済学者たちは、あたかも限りない成長が望ましいものであり、かつ可能であるかのごとく現在も振る舞っています。

仏教の理念を実践する傍ら、庭野日敬氏（1906—1999）は、シューマッハーワーの時代よりはるか以前に、世界平和に向けた活動を進められました。高く、力強く育つ木のように着実に、庭野氏は言葉と行動の両面から平和を顕現されたのです。立正佼成会は、個人や社会の向上に貢献することで世界に知られる在家仏教教団です。庭野氏は、世界宗教者平和会議とアジア宗教者平和会議の創設にも尽力されました。二つの組織は、現在でも諸宗教間の協力と対話による平和を推進する上で重要な役割を果たしています。

教育者で思想家であった新渡戸稻造氏（1862—1933）も、“時の権力者”と立ち向かいながら、世界平和に生涯を捧げられた卓越した日本人です。（私が生まれた年に亡くなられたため）新渡戸氏にお会いすることはできませんでしたが、氏の弟子でジャーナリストであった松本重治氏（1899—1989）と奥様のことはよく存じ上げております。松本さんは、日本人と諸外国の人々との間の文化交流と知的協力を推進するために国際文化会館を設立されました。私は、社会参加仏教を進める者の一人として、また佛教者国際連帯会議（INEB）の創設者の一人として、こうした偉大な人物を身近に拝むことができたことを光栄に思います。とは言え、私たちの活動は政治には直接関わることはせず、この活動に関わる人々全員に利するように、ス

ピリチュアルなレベルで活動すべきであると思っています。

私たちに必要なのは、文化に対する繊細さと政治への関心、そして社会に関わりながら公益の問題に取り組み、そして乱用がはびこる状況を指摘する勇気を持つことです。世界の状況をはっきりと見据え、しっかりと認識するためには、自分が今まで持っていた考え方を改め、自分たちの批判の対象となる人々への偏見を取り除かねばなりません。善意の人々と共に活動することを通して、権力の乱用に気づき、立ち向かうことができるようになります。さまざまな宗教やイデオロギーを持つ人々、そして無神論者や不可知論者を含めたすべての人びとに大切なのは、お互いの意見に耳を傾け、非暴力による手段を常に保ちながら正義を実現していくことです。そしてどのような状況下でも平等を重視することです。そのことは、恵まれない人々や抑圧された人々とつながりを保つ上で大切になります。

こうした活動を継続していくためには、若い世代の人々の意識を高める必要があります。私たちは彼らが自由、独立心、足るを知る心、そして慈悲と寛容性を身につけ、競争よりも協力、量より質を大切にする人間に成長するような支えにならなくてはなりません。若い世代の人々には政府やメディアの宣伝だけでなく、正確な情報が必要です。現在の財政危機は、こうした本質的価値を高めていくための好機です。

子供たちが、自分たちの可能性に気づき、次世代のリーダーとして活躍するためには、私たち自身が模範とならなければなりません。私たちは、ホモヒポクリティクス（偽善的人間）やホモエコノミクス（経済的人間）ではなく、ホモサピエンス（知恵ある人）にならなければなりません。新自由主義経済学や市場原理主義の実体を見抜かねばなりません。今日、ギリシアでは、国民のためではなく、大金持ちをさらに豊かにするために、公営企業の民営化を意味する緊縮政策が実行に移されようとしています。持続可能な未来を構築するために、私たちに欠けていた批判的思考と、仏陀が説かれた反省の能力を次世代の人々が身につけるための手助けをしなければなりません。そして、自らの貪欲さ、憎しみ、迷いに立ち向かい、社会を正義と平和のひな形へと変革しなければなりません。

仏教のメディテーションは、生命の最も大切な要素として正しい呼吸法を教えています。呼気と吸気に意識を集中して行なうようになると、貪欲、憎しみ、迷いが自然に寛大な心や慈悲や知恵に変化します。そして、私たちは皆お互いにつながり合っているため、その場から同じ呼吸法が学べるのです。

あらゆる時代を通して、自然はこれまで多くの苦しみを引き起こしてきましたが、企業経営者や科学者による驕りは、今日の自然災害をさらに悪化させています。自然を敬うことは私たちの義務であり、他の生き物を自分たちの資源として見ることは許

されません。福島第一原子力発電所の事故で明らかに、技術の発展は必ずしも私たちに最善の利益をもたらしてくれるとは限りません。どの進歩を受け入れて応用するか、そしてどの進歩をよく監視し破棄すべきか、その見分け方を学ぶ必要があります。

謙虚な気持ちと共に、自分たちだけでなく将来の七世代にわたる人々への愛情を持つことができれば、「非暴力」と「真理の力」の時代を実現することは可能です。ガンジーや聖徳太子、そしてアショーカ王からも学ぶことができます。かつては「国内総生産」が、経済的繁栄の国際標準でした。今日では、「国民総幸福量」の考え方が、ブータン王国やラダック地方や【インド南西部の】ケララ州を先陣に、広く受け入れられつつあります。

限りない成長と片時も休むことのない資本の蓄積を是とする経済理論が、世界銀行、国際通貨基金、国際貿易機関、そして世界のほぼすべての国の政府においていまだに支配的ですが、近年、こうした考え方からの離脱が注目を集めています。インドの経済学者アマルティア・セン（1933年—）、アメリカの経済学者のジョセフ・スティグリツ（1943年—）とジェフリー・サックス（1954年—）をはじめとする学者たちは、現在主流となっている経済学がもしこのまま野放しにされた場合、世界は破滅に向かうという認識を表明しています。昨年イスのダボスで開かれた世界経済フォーラムの主催者によって、フランスの仏教僧侶マチウ・リカール（1946年—）が招聘され、「国民総幸福量」について基調講演を行ないました。これが富裕層や権力者による単なる宣伝行為ではなかったことを祈りたいと思います。シーマッハ・カレッジのシンクタンクは、ロンドンの新経済財團と共同で、仏教経済学の講義を大学レベルで行なうことを提唱し、その普及に努めています。また、ペンシルバニア大学では、修士過程のカリキュラムに「国民総幸福量」の導入を検討しています。

“時の権力者”というのは、自分たちの持つ特権を自ら手放すことはしません。彼らは最後まで特権を守り通します。暴力の構造は自然に崩壊することはありません。それには“非暴力による”働きかけが必要です。前進するためには、たとえ目的達成のためであっても、暴力的な手段は控えなくてはなりません。イラクやアフガニスタンやリビアなどで暴力行使している米国、チベットや新疆ウイグル自治区における中国、そしてビルマの軍事独裁政権など、暴力行使するものの存在は歴史の過った側面です。インドネシアの特別州アチェのように、タイ王国の南端の3つの州にも、より大幅な自治が与えられなければなりません。ここでも非暴力による以外に実現の手段はありません。

マハトマ・ガンジー（1869—1948）は、大英帝国の虚言を暴くために「真

理の力」を理念に用いました。中国やその他多くの国々では、いまだに民衆に対する欺瞞が行なわれていますが、支配階級による欺瞞はいつまでも続けられるものではありません。全体としてマスメディアは、私たちを資本主義や消費至上主義の中毒にするための洗脳を続けていますが、新しい科学技術は新たな情報源に接する機会を私たちに提供してくれるため、資本主義を越えた世界の実現も不可能なことではありません。

キューバのフィデル・カストロ氏（1926—）は、武力によって政権の座につきましたが、現在は無意味な暴力を非難して、非暴力への志向を表明しています。数十年に及ぶキューバへの米国の暴力行使にもかかわらず、カストロは今でも、アメリカの国民はキューバの友人であり、アメリカの若者に見られる非暴力への志向を正しい方向への動きであると見てています。

東ティモールの前大統領ジョゼ・ラ莫斯＝ホルタ氏（1949—）も、非暴力と赦しを徳目として支持しています。氏はインドネシアによる残虐な侵略と占領にもかかわらず、同国を赦し、協力さえしています。同氏は、アパルトヘイト（人種隔離政策）が犯した罪に対して赦しを与えたネルソン・マンデラ氏（1918—）の姿に啓発されたのです。インドネシアの前大統領アブドゥルラフマン・ワヒド氏（1940—2009）は、ガンジーが理想の人物像であると表明していました。

カンボジアの政治は、他の多くの国々と同様、暴力と欺瞞に満ちています。しかし、カンボジアの仏教僧侶であり、庭野平和賞の受賞者でもあった、故マハ・ゴーサンダ師（1929—2007）によって創設されたダンマヤトラ（法の巡礼）は、カンボジアで重要かつ影響力を持つ運動です。ビルマでは僧侶が民主政治のために闘い、軍事独裁政権による反革命の残虐行為に対して深い瞑想と祈りによって応え、それは僧侶の衣の色にちなんで「サフラン革命」（2007年）と呼ばされました。チベットでも同様に、中国支配に対して僧侶は50年以上にわたり非暴力の抵抗を続けています。そして、近年ダライ・ラマは非暴力でチベットを民主化する道を歩み始めました。

学問の世界では、シューマッハーの仏教経済学によって切り開かれた道の跡を追隨して、数多くの図書が出版されました。その中には、アメリカの政治学者グレン・ペイジの『殺戮なきグローバル政治学』（Nonkilling Global Political Science）やアメリカ人仏教学者デヴィッド・ロイの『西洋の仏教史：不足の研究』（A Buddhist History of the West: Studies in Lack）などがあります。ダライ・ラマの指導のもとで、科学と靈性に共通する見識に光を当てるためにマインド・アンド・ライフ研究所から出版された書籍も、もちろんその線上にあります。

グローバル化とは最新版の資本主義のことであり、新帝国主義がその実体です。こ

これまで以上に、私たちには個人の意識変革に基づいた自制と、新たな集合的主体の創造が求められています。それを成し遂げるには、まず、内面的・精神的変革が要求されます。もし私たちが貪欲を寛大さに、憎しみを慈愛に、そして迷いを知恵に変換できれば、自分自身を統治することができるのです。世界平和の実現には、内なる平和の種を育むことが必要です。ダライ・ラマが指摘するように、それは困難な道ではありますが、それこそが世界平和を実現する唯一の道なのです。

最後にダライ・ラマの『慈悲と平等へ向かって』の一節を引用して、私の受賞記念のスピーチを終わりたいと思います。

「私たちの知る地球上の平和と生命の生存は、人道的な価値観を守ろうとする責任感に欠けた人間の活動によって脅かされています。自然や天然資源の破壊行為を引きこすのは、無知、貪欲、そして地球上の生物に対する敬意の欠如です。敬意の欠如は、地球上の人間の子孫にまで及ぶことになります。なぜなら、もし世界平和が実現せず、自然環境の破壊が今のペースで続いたとしたら、未来の世代は傷つき劣化の進んだ惑星を引き継がなければならないからです。」

「私たちの祖先にとって地球は豊かで、寛大な存在でした。今でもそれは変わっていません。多くの先人たちにとって、大自然は無尽蔵で持続可能なものでしたが、今の私たちにとって、それは大自然を大切に扱った時だけに限られます。過去の破壊は無知のなせるわざであり、それを許すことは難しいことではありません。しかし、今日、私たちには多くの情報が与えられています。ですから、祖先から受け継いだものを倫理的見地から再吟味し、自分たちの責務を問い合わせ、来るべき世代に何を引き継ぐかを考えることは、私たちにとって不可欠なのです。」

「今が重要な時代なのは明らかです。グローバルなコミュニケーションが可能になっても、平和に向けて意義ある対話が持たれるよりも頻繁に対立が起きています。科学技術はすばらしい成果をもたらしましたが、それに匹敵する悲劇が飢餓を抱える地域の問題や動植物の種の絶滅などによって起きています。宇宙探査が行なわれている傍らで、海洋や淡水の汚染が進み、そこに生息する生命の大部分は、いまだにほとんど知られていないか、あるいは誤解されたままの状況にあります。希少な動植物や昆虫や微生物の多くとその生息地が、未来の世代にはまったくの未知のものになってしまふかもしれません。私たちには能力があり、そして責任があります。手遅れになる前に、行動を起こさなければなりません。」